村落内住居様式の移動調査法

立川 綱士

最近では、一村落内に、建築様式の異なる、種々の住居が混在しているのが普通になった。そこで、いままでの民家の研究で行なわれていたような、個別の住居の調査によって村落内の住居を代表させるとする考え方ではなく、種々の建築様式をもつ住居を混在したままの姿でとらえる必要があり、そのためには全数調査を行なうことが望ましい。しかし、これには多くの時間と労力を必要とする。そこで筆者は、この難点を幾分なりとも解消するため、調査項目を2・3の要素に限り、数村落の簡便な調査を行ない、その得失を考えた。

この方法は自動車に4人が乗車し、後の座席の2人がそれぞれ道の片側の住居の建築様式を配列順に判断し、分類に従って声を出して知らせる。助手席のスクリプターはそれをメモしていく。フィールドノートの右ページ下から書いていくと、集落を通過した時には個々の住居の、たとえば屋根形・位置・配列などが書かれることになる（非住居・公共建築物・納屋などは調査から除いた）。車速は20~30km/hが適当である。慣れるとスクリプターは、自分でも住居を見、後の2人の声を確認の助けとしながら記入できる。

猪苗代湖の西岸、茨城街道ぞい(小坂~堰場)を調査(1972.7.5.実施)したが、そのうち会津若松市赤井について、模式図を示した。ここでは屋根の形と材料の2要素のみを調べた。組合せ総数は9つであるが、赤井にはそのうち7つがみられた(表)。ところで、たとえばトタン寄棟といっても、かやぶきの上からトタンをかぶせた型式と、より勾配のゆるい、はじめからトタンぶきで建てたものとが識別されず、かや寄棟の中にもシンプルなものや半切妻が混じっている状態で、この簡易調査では、いまだ村落の複雑な外観を十分には再現し得ていない。

この方法の得失をまとめると：

(1) 道路に面してだけ住居のある村落では使えるが、塊村状になると全数調査は不可能である。

(2) ききのがし・見のがし・重複して数えるおそれ・などがあり、それをチェックする手段がない。

(3) 一度に3つ以上の要素を調べるのは困難である。

(4) 一方、歩いて調べるよりは、かなり広い地域を比較的速く、数的におさえることができるので、予察としての効果は十分に期待できると思われる(上記小坂~堰場間8村落を調べるのに約40分で終わった)。

(1972.8.1 受理)

Methodology for Observation of House Types Shigeo TACHIKAWA

In order to understand aspects of houses in today's settlement it is important to be able to observe house types speedily and extensively. One method is to utilize the automobile. Using a pre-determined classification scheme, two observers may rapidly relay the data to a third person for recording. This method appears to be useful for a preliminary study.